ず，ナポリとポンペイの見学はシンポジウムに組み込まれていたが，その他の歴史的都市を巡ることはできなかった。

シンポジウムの始まる前の一日だけの自由な日を，アッピア街道の踏査に費した。周知のとおり，「全ての道はローマに通ず」といわれた古代ローマ道は，直線的な路線をとって計画的に測設され，現在もなおその痕跡はヨーロッパ各地に残っている。その最も著名なものがアッピア街道で，ローマ郊外の部分はローマオリンピックの際にはマラソンコースにも組み入れられ，訪れる観光客も多い。

しかし，私が見たいのは観光客などの来ない所で，できるだけ古い状態を留めている部分で，しかもローマから日帰り可能な所である。従来，日本の古代道である駅路は，自然発生的な踏分路を若干拡幅整備した程度の，曲折の多い小路でローマ道とは性格も形態も全く異質なものと考えられていた。それが，私もその一翼をになってきた近年の歴史地理学的研究によって，日本の古代道もまた古代的中央集権国家の官道の世界的例にもれず，直線的な計画道であったことがしだいに明らかになってきたところから，名にし負うローマ道の，ごく普通の所をこの目で見たいと思ったからである。

出発前に，イタリアの1／25,000地形図を検討して見付け出したのが，ローマ東南方約20kmの火山の中腹にあるアルバーノから，火山麓のチステルナ・ディ・ラチナまで，火山の山腹を斜めに直線に通る部分である。アッピア街道は現在の国道に踏襲される部分が多いが，この区間は19世紀に建設された新道が迂回路を作って，これが現在の国道となっているので，旧道は多分に昔時の面影を残していると考えられ，またアルバーノまではローマからローカル線の電車があり，チステルナ・ディ・ラチナはローマ・ナポリ間の幹線鉄道の沿線であるから，この間約20kmを歩けば日帰り可能な筈である。

イタリアの9月はまだ暑く，乾燥していて日射しは強く，持っていた小さな水筒はたちまち空になって，猛烈に喉が渇いてどうなることかと思ったのが思惑外だったが，結局は目的を果した。ローマ道が日本の古代道と共通する処が多いことを実感したのは大きな収穫であった。このことについては，『歴史地理学』124号（1984）に「日本古代駅路とローマ道との比較研究――序説――」と題して小論を書いているので，興味のある方は一読していただければ幸いである。

しかし，ここで強調したいのは地図の効用についてである。この小調査行は独りで計画して独りで実行したものであるが，言葉も通じない初めての土地でも，地図さえあれば案内者がなくても自由に行動ができて，ある程度の調査も可能であることを体験して大きな自信を持った。

これに味を占めて，1984年の国際地理学会議（I・G・C）の時には，小林健太郎（滋賀大）・大嶽幸彦（上越教育大）の両氏を誘って，パリ西北郊に残るローマ道の痕跡の踏査に一日を費した。この時は同行者があるだけに気が楽で，何よりもフランス語に堪能な大嶽教授が一緒なのが心強かった。

思えば，地図は万国共通の言語みたいなものである。この言葉を解する者にとって，その行動範囲は地図がある限り拡大する。地理を学ぶ者にとって大きな力となるものであって，我々はこれを大事にしたい。以来，私は各地のローマ道を地図上で歩いている。

（国学院大学）

インテリジェント・シティー

高阪宏行

このところ，至る所でハイテク・ブームが広がっている。先日，なにげなしにテレビをつけると，企業のハイテクを紹介する番組をやっていた。そこでは，インテリジェント・ビルの紹介を行っており，私には，今まで聞いたことのないビルの名前が頭に残っただけであった。

海外における最近の計量地理学は，応用・政策分野に急速に広がっている。私は，これらの成果を統合する新しい都市概念が必要であると考えている。この都市概念は，21世紀の都市政策を考える上で，正しく中心的な役割をはたすものでなければならない。番組を見た数日後に，私の脳裏に「インテリジェント・シティー」という言葉が浮んだ。この用語は，すでに建設省の「高度情報化社会に対応した都市整備のあり方に関する懇談会」などで使用されているようであるが，以下では私なりにこの用語を定義している。

インテリジェント・ビルとは，（1）情報・通信システムの設備，（2）（1）を用いたサービスの提供，（3）管理システムの設備，の3点を備えた「情報化ビル」と定義できる（井上・澤本，1985，設備と管理，vol.，19—13)。このような考えを都市に応用すると，どのようなインテリジェント・シティーが生まれるのであろうか。

まず，インテリジェント・シティーの構成員は，市民，経済活動，行政体の3者から成り立っている。その理念は，市民には豊かな生活環境を提供し，経済活動には活気に満ちた経済環境を与え，行政体は効率的で安定した都市経営を目指すものである。その概念の定義は，ビルの場合と同様で，上記の（1）～（3）の3点を備えた「情報化都市」と定義できよう。第1は，情報・通信のネットワークを都市内に張り巡らすとともに，家庭や事業所には端末装置を普及させるのである。第2は，これを用いて，（a）生活サービス，（b）就業サービス，（c）教育・娯楽サービスを提供する。aでは，買物情報や医療情報などが得られるとともに，在宅にて買物サービスや医療サービスが受けられる。bは就職情報や在宅就業などと関係し，cは現在のテレビの機能を拡張したものである。第3は，都市を経営・管理するシステムと関連し，ここにおいて計量地理学の成果が応用される。

この都市計画・管理システムは，計量モデル支援による計画・政策決定システムを含み，都市の計画や政策決定に対し適切な情報を提供する。これは，①情報システム，②計量モデル，③コミュニケーション・システム，④スーパー・プラン，⑤達成指標，の5つの要素から成り立っている（Clarke, M. and Wilson, A. G., 1985, Environment and Planning B, Vol. 12）。医療サービスの例をとって，このシステムの働きをみてみよう。まず，医療関係者から現在抱えている問題が提起される。例えば，高齢者医療機関の不足があげられたとしよう。すると，情報システムでは，地区ごとの人口構成や医療費支出などの最近のデータが収集される。これらのデータは計量モデルで利用され，都市内における将来の高齢者分布や医療機関の利用パターンが予測される。さらに，現医療施設のままの場合や新しい施設を立地した場合など，様々な状態の下でシミュレーションが行われる。これらの結果に対し，問題解決の程度や組織の効率性などの側面から目標達成の指標が算出され，各状況に対する評価の基準が与えられる。これらの情報は，実戦的なローリング・プランであるスーパー・プランの中に組み込まれ，そのプランは，モデル分析の結果や達成指標とともに，コミュニケーション・システムにおいて，経営部門や医療部門など利害の異なる医療関係者の間で検討される。

以上のように，インテリジェント・シティにおいては，特に都市経営・管理システムにおいて，計量地理学の成果が広く応用されると考えられる。地理情報システムや都市モデル分析が，計画・政策サイドにとって不可欠な存在になっている今日，わが国においても計量地理学の側から21世紀の都市のあり方に関し，大いに発言すべきである。

（日本大学）